

サステナビリティレポート2004 > トップコミットメント & ハイライト > サステナビリティを実現するために

**トップコミットメント
ハイライト**



富士ゼロックスらしさ—人の可能性を信じること

富士ゼロックスは創業以来、経営理念や事業ビジョン、価値観などを内外に明確に示し、企業経営の根幹をなすものとして、大切にしてきました。

例えば、富士ゼロックスの入社式でいつも引用されるロバート・フロストの「誰も行かなかった道」という詩の一節「踏みならされた道ではなく、誰も通ったことがない道を選ぶ」という言葉は、ゼロックス創業時のベンチャー企業としてのチャレンジ精神を端的に表現したものであり、ゼロックス・スピリットとして今も語り継がれています。また、創業期に企業理念とした“*Our business goal is to achieve better understanding among men through better communications.* (より良いコミュニケーションを通じて人間同士のより良い理解を)”は、我々がビジネスを通じて創り出す価値について、その基本的な方向性を示しており、これはその後定められた企業理念の中にも、脈々と受け継がれています。

富士ゼロックスは、企業やビジネスの新しいあり方についても、さまざまな形で外部に発信、提言し、また自ら実践してきました。例えば、ビューティフル・キャンペーンは、エコロジーという概念が話題になり始めた1970年、「人類の進歩と調和」をテーマに大阪で開催された万国博覧会の年に1年にわたって展開。高度成長期真っただ中、モーレツに働くことを勧める日本社会に、環境問題のみならず、働き方に対しても、鋭い警告を内包するキャンペーンとして高く評価されました。

持続可能な社会を目指して、本業での貢献

地球規模の問題が顕在化する中、サステナビリティを考えると、地球環境や社会問題と企業活動を分離するのではなく、一体としてとらえなければならない状況に来ていると思います。地球規模の問題の解決と本業での取り組みとを合致させることが重要です。

例えば、環境問題について、当社の責任は大きく分けて二つあると考えています。第1は、開発や生産、販売、サービスなどの自らの企業活動において、地球温暖化や資源枯渇、化学物質などの問題に対し、環境負荷を最小化すること。第2は、お客様に対して、より少ないエネルギー、資源で、より多くの価値を創り出せるような商品やシステム、サービスを提供することです。私は、この二つの視点からどれだけ「サステナビリティ」に貢献できているかをとらえ、目標達成へのステップを踏んでゆくことが重要であると考えています。

環境問題をはじめとする地球規模の問題への対応には、幅広くかつ長期的な展望が重要です。私は、国連が提唱しているグローバルコンパクトにも署名し、自社はもちろん、取引先にも広い視野での取り組みを求めているところです。



現在、企業においては、情報インフラの飛躍的な発達とグローバル化に伴って、仕事のプロセスや情報システムのあり方などが急速に変化し始めています。

富士ゼロックスでは、「オープン オフィス フロンティア」(OOF)という事業ビジョンを提唱して、このような世の中の動きに対応し、さらにそれを加速してゆくことを目指しています。OOFは知的活動をネットワーク化し、より効率の良い働き方を実現すべく、それらに役立つシステムやサービスを提供するものです。そして、それらを通じてお客様の競争力を高め、トータルなコスト削減を可能にするものですが、同時にお客様における環境負荷を低減する、すなわち、より少ない資源消費でより多くの価値創造を可能にするものといえます。グローバル化やアライアンス(提携)が広がる中で、企業の活動量は増加し、現状のままでは、エネルギーの使用量は、飛躍的に増大していきます。私たちは、OOFの考え方やアプローチがこの流れを大きく変える可能性を持っていると考えています。

えています。

時間や場所に縛られずに、組織や企業の枠を超えた連携を可能にする「新しい働き方」を提案するOOF事業ビジョンを、私たちは21世紀の新しいビジネス・モデルとして、お客様とともに、さらに進化させ、大きく育てていきたいと考えています。

対話と信頼ーキーワードはコミュニケーション

創業当時から当社は社会性を重視した経営を行なってきましたが、この経営思想をさらに進めて、1993年に長期ビジョンの「目指す経営」として「よい会社構想」を発表しました。全社員が共有できる明快な言葉で表現したよい会社の三つの側面、「強い・やさしい・おもしろい」のバランスを取りながら伸ばしてゆこうというものです。これは、企業理念を定めた、ミッションステートメントとは別に、いわば我々の行動規範として重要な指針となっています。この「よい会社構想」は、サステナビリティのトリプル・ボトムラインである「経済・社会・環境」の3要素に相当するものでもあります。

富士ゼロックスおよび関連会社には約3万5千名の従業員が働いています。よい会社を築いていく原点は、一人ひとりの従業員です。働くことを通じて新しい価値を生み出してゆく喜びや、それが社会に役立っていることを実感できる手応えであると信じています。仕事の中に「おもしろさ」を見いだすこと、社会や環境に対して「やさしさ」を持って接することが重要です。そのことを通じて、仕事へのエネルギーが生まれ、厳しい市場競争に勝ち抜いてゆく「強さ」が生まれます。

ビジョンとグランド・ストラテジーを共有する社員の一人ひとりが、自らの判断と能力で現場を動かすことで、個人としても企業集団としても、素晴らしい成果を挙げることができます。私にとってはこのような経営が理想であり、私はこれを、サッカー型経営と呼んでいます。サッカーは他のスポーツと違い、ゲームが始まると監督がいちいち選手に対して指示したり、タイムを取ったりすることはできません。監督の主な役割はチームとしての理念を確立すること、その上で、明確な目標とグランド・ストラテジーを描きそれを選手と共有すること、そして、それを実現すべく、選手を鍛え、育成することにあります。ゲームが始まれば、現場における選手の自立性と能力がすべてです。サッカーのプロは最高のプレーをすることを通じて自己実現を果たします。監督と選手の関係において最も大切なことは、ビジョンと戦略の共有、そして信頼関係であり、そこでは日常のコミュニケーションが極めて重要な役割を果たします。

経営も同じです。高いモチベーションと個人技を持った視野の広い社員の力が、組織としてのチーム力に結集される。サッカー型経営は、まさにそのような社員が存分に力を発揮する場を創出すること、そのチームワークを通じて、「よい会社」を目指すことにあります。サッカーのプロがそうであるように、多くの社員にとって企業は仕事を通じて自らの成長を図り、自己実現をする場所です。富士ゼロックスは社員がそれを実感できる場でありたい、と願っています。本誌でご紹介する社会や環境に関する活動の多くが、社員の個人やグループの自主的な活動の中から生み出されてきています。



「歩く」速さと背の丈という目線の高さ

私はよくウォーキングをしますが、「歩く」速さと背の丈という目線によって、車でドライブするときとは見えるものががらりと変わります。梢の葉、草むら、鳥や虫などに感性が洗われ、季節の移ろいを感じます。そこにはさまざまな生き物が暮らしていて、我々人間だけでなく実に多くの多様な生き物がこの地球上に息づいていることが実感できます。人も地球の生態系に支えられているという当たり前の視点で考えると、その人が中心となって存在し、活動する当社の事業活動も、地球の生態系の枠組みを超えるものであってはならないことを再認識することができます。

企業の持続性を考えるとき、我々の取り組みも本質を常に意識しなければならないと思います。そのためにも、CSRを今まで以上に高いレベルで実現しなくてはなりません。CSRは「サステナビリティ」を実現するための必要条件ですが、残念ながらまだ十分条件にはなっていないと思っています。

創業時から連綿と受け継がれてきた社会に対する貢献の意義と環境に対する配慮は、今、我々の「よい会社構想」として、そして、事業ビジョンである「オープンオフィス フロンティア」と、それを受けた事業戦略として、経営に、そして社員の中で共有されています。

そして、同じ考え方が、今、世の中でもCSRやサステナビリティの思想として注目されています。我々は、人の可能性を信じることを基軸にこれからも個を活かす経営を進めてまいります。そして、自らの活動の社会や環境に対する負荷を最小限に抑えることだけでなく、お客様にも我々の商品とサービスを通じてお手伝いをしたい。それが社会や地球のサステナビリティにつながることを確信しています。

どうか富士ゼロックスの進む道をご注視いただき、併せて忌憚のないご意見を賜れば幸いに存じます。

富士ゼロックス株式会社 代表取締役社長

有馬利男